ベトナム人研修・技能実習生の漢字学習ストラテジーに関する研究

教科・領域教育専攻
言語系コース（国語）
三國　可奈

指導教員　小野　由美子

Ⅰ　研究の目的

本研究の目的は、2名のベトナム人日本語学習者に焦点をあて、漢字学習の際に、学習者がどのような学習ストラテジーを使用しているのかを調査し考察することである。

学習ストラテジーとは、「学習を易しく、より早く、より楽しく、より自主的により効果的に、そして新しい状況に素早く対処するために学習者がとる具体的な行動である」（オックスフォード, 1994, p8）と考えられている。学習ストラテジーは、取り組むべきタスク/解決すべき問題/場面/条件によって異なるとも指摘されている。たとえば、漢字を習得する時と文法を習得する時では、同じ学習者でも異なった学習ストラテジーを用いることが予想される。学習者が学習ストラテジーを選択する場合に影響を与える要因として、オックスフォード（1994）は意識の度合い、学習の段階、タスクの必要性、教師の期待、年齢、性別、国籍/民族、学習スタイル、個性、動機づけのレベル、言語学習の目的をあげている。学習者は各々が使用しているストラテジーが適切であろうとなかろうと、既に無意識のうちになんらかのストラテジーを使っていることが明らかにされている。

Ⅱ　論文の概要

第1章では、漢字学習ストラテジーに関連のある先行研究を概観した。漢字学習ストラテジーを調査した先行研究の結果は、漢字学習では、認知ストラテジーの使用が多いという点で共通している。先行研究を一読する限りでは、大学に籍を置く学生や留学生を対象としており、（池田, 2007；大北, 1995；平塚・副田, 2005）、研究方法としては、比較的多数の被験者に対して、質問紙調査や実験を行うというものが主である（池田, 2007；大北, 1995；平塚・副田, 2005；松本, 2007）。このような方法は、一度に多くの被験者からデータを得ることが可能なため、一般的傾向を見るには適した研究方法であると思われる。しかし、自然な学習環境の中での観察調査ではないため、正確な結果を得られない可能性がある。

第2章では、本研究の方法を3節に分け、詳細に述べた。以下は、第1節のベトナム人研修・技能実習生の日本語クラスと第2節の観察対象の学習者についてまとめたものである。

【日本語クラス】（2010年1月現在）
学習者：研修・技能実習生8名
場所　：徳島県鳴門市の雇用者宅の納屋
回数　：月2回（2008年5月から開始）
指導者：鳴門教育大学大学院生
（日本語教育分野）

【観察対象の学習者】（2010年1月現在）
年齢　：21歳
性別　：女性
母語　：ベトナム語
日本語レベル：初級後半～中級前半
日本語学習歴：約1年4ヶ月
入国日：2008年9月

第3節のデータ収集と分析方法については、

毎回の日本語クラスでは、授業中にビデオを 1 台設置し、学習者全体を撮影した。本研究に用いるデータとして、以下の日時を取り上げ、指導者と学習者のやりとりを文字おこしした。

①2009 年 4 月 15 日（水）約 5 分間
②2009 年 5 月 26 日（火）約 20 分間
③2009 年 6 月 9 日（火）約 20 分間
④2009 年 6 月 23 日（火）約 20 分間

分析方法 は学習者 A,B の発言や表情、動作などにも注目しながら、それぞれが漢字学習に使用している学習ストラテジーを探った。そして第 4 節で、漢字学習ストラテジー分類表について説明した。

第 3 章では、各回の授業分析を行った。

学習者 A、B 共に、2009 年 5 月 26 日のストラテジー使用数が他の回と比べて比較的多い傾向にあった。差がひらいた要因としては、補償ストラテジーを使用していることが挙げられる。学習者にとって指導する漢字語彙の関連性が深いものであるかどうかによって、補償ストラテジーの使用に差がでる可能性があるということ、そして、補償ストラテジーは、学習者のモチベーションやクラスの雰囲気がよい時に出てくる傾向があることが示唆された。

学習者 A、B ともに認知ストラテジーの使用が多く観察された。全ての回で認知ストラテジーの「繰り返し練習する」が最も使用率が高かった。この要因は、指導内容と指導方法が大きく関係していると考えられる。漢字の書き順指導の際に、学習者に練習してもらうように指示し、練習するための練習用紙を配布し、学習者が正確に漢字を書けているか指導者が確認する。ここから、「繰り返し練習する」のストラテジーの使用が必然的に多くなることがわかる。その他、認知ストラテジーの「資料を使う」、「漢字内の構成要素を分析する」、「ノートを取る」、記憶ストラテジーの「連想する」、社会的ストラテジーの「質問をする」の使用が多く観察された。

今回の研究では、学習者 A、B の漢字学習ストラテジーの使用について探った。その結果、両者のストラテジーの使用にほとんど差異はみられなかった。国籍、性別、年齢、日本語学習歴、入国日が同じで、漢字学習の内容や方法が同じである 2 人が使用する学習ストラテジーにほとんど違いがないことが示唆された。ただし、2009 年 5 月 26 日の授業の、記憶ストラテジー、「連想する」のみに差がみられた。しかし、4 回分の分析からは、両者のストラテジーの使用に差があると判断することは難しい。

Ⅳ　今後の課題

①多様な調査手段を用いた分析方法の提案

ビデオ映像に加えて、詳しい参与観察ノートや、質問紙、インタビューなどを用いることにより、学習ストラテジー使用の実態により深く迫ることが可能となる。今後の課題としたい。

②漢字学習ストラテジー分類表の有効性の検討

オックスフォード（1994）の分類表は、授業内と外が混在しているため、授業内では使用しない学習ストラテジーもいくつか見受けられた。今後、学習ストラテジー表をどのように活用していくかを考える必要がある。

③ベトナム語での発話の内容や、ノートの分析

ベトナム語は、日本語ができるベトナム人に訳を依頼することで解決できる。ノートも、何を書いているかを観察できれば解決できる。以上の 2 点が解決できれば、分析結果が異なってくる可能性がある。

④文字おこしの目通しの依頼

文字おこしした資料を、日数がたたないうちに他の指導者に確認をお願いする。コードをつける作業の前に、文字おこしを確認しあうことで、より正確に分析できるからである。

以上 4 点を今後の課題としたい。